

納光弘

財団法人慈愛会会長
元鹿兒島大学医学部第三内科教授

高校生のときに 昆虫の生態を研究

「僕の趣味は努力すること。努力そのものが趣味なのです」という医師であり日本画家でもある納光弘先生。しかも納先生の努力は、どれも素晴らしい実を結んでいる。

まず高校1年生のときに「タイワンプバメシジミ」という日本にいないはずの南方の蝶を鹿兒島で発見し、越冬するようすを論文に綴り、今でも『原色日本昆虫図鑑』に掲載されている。「僕のサイエントティストとしての第一歩になりました。子供の頃は勉強もせず野山を駆け巡るガキ大将でした。でもときどき本を読んでいると父が頭を撫でてくれて……。だから『本を読むのっていいことかもしれないなあ』と思います、一生懸命に本を読みました」素直な少年時代が

趣味は努力。人生を前向きに、 大切に生きてささえいれれば ストレスなんて溜まらない

思い浮かぶ。

大学生のときに 自転車で日本縦断

そして九州大学に入学した年に、たった一人、自転車で日本縦断無銭旅行をした。

「辛かったのは箱根越えと、一宿一飯を頼もうにも、人がいない北



18歳、九州大学医学部に合格後、日本縦断自転車無銭旅行をしたときの写真。

海道原野を走ったときくらい。1961年の日本は安全でやさしい人ばかりでした」と当時の写真を見せながら懐かしそうに話す。携帯電話もない時代、行く先々で家族あてに毎日手紙を書いた。

医学部を卒業後は、内科と消化器を専門に選び、聖路加国際病院でも内科の臨床研修を受けた。

「ある日突然、雲の上の人のような存在だった日野原重明先生から『今日、家にご飯を食べたのにおいで』と声をかけていただいたのがきっかけで、今でもずっとお付き合いをさせていただいております。日野原先生の患者さんへの接し方や、人材育成への真摯な姿勢は私の医師として、そして人としての生き方の道標になっています」

神経難病の 世界的発見も実現

その後、鹿兒島大学医学部に入学して、神経内科を学び始める。

「恩師の井形昭弘先生との出会いに感動し、筋ジストロフィー、筋無力症といった神経難病に苦しむ患者さんのために一生を捧げようと決心しました。アメリカのメイヨークリニックに留学、貴重な経験をしました」という納先生は、「筋無力症候群は抗カルシウム抗体で起こる」という病態のメカニズムを解明に貢献し、さらに1986年にはHTLV-1関連脊髄症(HAM)という脊髄の慢性炎症症による歩行困難、排尿障害を起こす



鹿兒島私立病院に飾られている納先生の日本画「陽光に輝く南岳」。桜島が輝いている。



Osame Mitsuhiro
1966年九州大学医学部卒業後、鹿兒島大学、聖路加国際病院、国立療養所南九州病院、東京大学などを経て、77年米国メイヨークリニックへ留学。81年鹿兒島大学医学部第三内科助教授、87年同教授、2001年より鹿兒島大病院長を2年間務める。07年に退職し、現在に至る。日本画家としても有名で2010年3月、日展日本画部春季展に入選した。

病気を発見し、命名した。

59歳で痛風に。 「神の啓示」と 研究スタート

2年後には教授になり、2001年からは鹿児島大学病院の病院長を務めるが、このときの激務で59歳になって、痛風の発作が起る。

「さんざん患者さんに『お酒を控えましょう』と言っておきながら、自分では35年間、大酒を飲み続けていましたから当然の結果(笑)」。医者の不養生のついでですね。『この痛みは神様が与えてくれたチャンスだから自分の体を使って徹底的に研究しよう』と思いき、さまざまなデータを取り、分析しました。その結果、『痛風はビールを飲み

ながらでも治る!』という本を出版して、全国で講演会を行って好評を博している。

早足でもスタッフにあいさつを忘れない

65歳で退職した後は、日曜日も外来をしようという以前からの夢を実現させた。

「病院だけが日曜定休なのはおかしい。医療はサービス業だから、日曜日に一人1時間かけてゆっくりと外来をしたくて……やつと実現した僕にとっては『夢追い外来』です」

病院では早足で歩きながらも、スタッフや患者さんに笑顔であいさつすることを忘れない。「ゴルフとウォーキングは僕の欠かせない健康法。ほぼ毎朝、港の堤防を歩きます」という納先生。

日本画家としても 退職後の人生を スタート

退職後にもう一つ夢を叶えた納先生。それは日本画家としての活動を再開したこと。しかも今年日展に入賞した。四季折々の桜島を描く精緻で落ち着きのある作品

は、鹿児島の大らかな病院に飾られて、病気に苦しむ人々の心を和ませる。情熱的でスケールの大きい人柄の納先生が描く日本画は、意外にも繊細で優美。「なんて美しい絵だろう!」と思わず絵に近づいて、触れたいくなるほど心、いや本能をひきつける。

「僕は群青色が大好き。同じ群青でも使う石の種類や加熱する温度によって、全く違った色になる。今は自然の石が作り出す日本画の世界に夢中です」というとおり、自宅のアトリエには色とりどりの画材が並ぶ。絵を描くときの納先生は、医師として患者さんに接するときの笑顔は消えて、集中した真剣な表情に変わる。

妻の手料理が一番健康にいい!

嫌いな食べ物は何もないという納先生は、奥様が作った昼食をおいしそうに食べる。ゴーヤなどの地元野菜、薩摩豚などを具にしたそうめんを一瞬のうちに平らげ、笑顔を見せる。

「妻の手料理が一番健康にいい!」という納先生に「自宅から強引に連れ出してオーロラを見に連れて行ってくれたりして、一緒にいると刺激的で楽しいです」と長年連れ添ったとは思えないほど初々しい奥様。デザートにはおいしいおのろけ話を伺い、心もお腹も満たされた。

妻の手作り薩摩料理
鹿児島出身の奥様が作る地元特産の新鮮な野菜と薩摩黒豚の焼き豚などを具にしたそうめんを召し上がる納先生。「痛風も糖尿病も注意しなければならぬので、妻の料理が一番安心です」と満面の笑顔。ごちそうさま!



アメリカ留学時代

米国メイヨークリニックに家族とともに留学したときの写真。一当時は円安で生活は大変でしたが、楽しい経験でした」と懐かしそうに話す。このときの経験が後の大きな医学的発見につながった。



Doctor's Q&A

Osame Mitsuhiro

Q. 食事で気を遣っていることを教えてください。

A. 体重のコントロールが全てです。

Q. 運動を定期的に行っていますか?

A. ウォーキングとゴルフ練習。

Q. 睡眠はどのくらいとりますか?

A. 午後9時に寝て午前3時に起きます。6時間寝ます。通常熟睡できますが、大事なものは熟睡できなくても横になれればOKということを知っていることが大事です。

Q. 絵はいつ描くのですか?

A. 平日は午前3時から午前5時まで、それと休日の空いた時間に描きます。

Q. 大きな病気をしたことがありますか?

A. 鹿児島大学病院長の時、疲労困憊で倒れ、4ヵ月間入院しました。

Q. もし医師になっていなかったら他にどんな職業をめざしていましたか?

A. 考えられません。

Q. いま最もやってみたいことを教えてください。

A. 全く同じ人生を繰り返したい。

Q. 好きな食べ物、嫌い(苦手)な食べ物を教えてください。

A. 私には嫌いな食べ物は皆無です。

Q. 座右の銘を教えてください。

A. 一度しかない人生、夢追って生きよう!

Q. 年齢を感じるときってどんなときですか?

A. すこし耳が遠くなり、目もメガネが必要になったとき。

Q. 心の支えは何ですか?

A. そうですね、家内です、と言うのは「キザ」すぎますかね。

指先に集中して、天然の岩絵具とニカフを混ぜながら風合いを確かめる。実に繊細な作業だ。